別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　林　淑 璋(りん　すーざん)

本論文「「談話標識」としての接続詞の機能―日華会話対照分析―」は、日本語と台湾華語の話しことばで、接続詞が談話標識として談話展開上に担う機能の解明を通して、体系論的に異なる日本語と台湾華語の談話標識の共通性と相違点を明らかにすることを試みたものである。

対照談話分析の先行研究は、日英対照研究あるいは英中対照研究が主流で、日本語と中国語（あるいは台湾華語）の対照研究は少なく、談話標識としての接続表現の対照分析も例外ではない。本論文は、日本語の接続詞と台湾華語の連詞を話しことばの中で捉え、それらを談話標識として分析することにより、日本語と台湾華語の異同の一端を明らかにすることを目的としている。

本論文は序章を含む全８章から成る。序章では、日本語と台湾華語の接続表現を談話標識と位置づけ、研究の概要を記述する。第１章で、分析対象となる日本語の「接続詞」と台湾華語の「連詞」について、先行研究をもとに、日華の接続形式の異同を語彙と構文の両面から論じた。第２章では、日本語の「接続詞」と台湾華語の「連詞」を談話レベルの分析対象とするために、談話標識の概念を導入し、談話標識への理論的アプローチを概観し、日本語と台湾華語の談話標識の対照分析の学問的意義を論じた。台湾華語の「連詞」は日本語に準じて「接続詞」と呼ばれる。

第３章では、接続詞を談話標識として分析するための理論的枠組を論じる。まず、接続詞が繋ぐ前後部分の論理関係の分析のために亀山(1999)の「整合性関係」の枠組みを、また、接続詞が談話の話題転換に機能するという観点から南(1981)の「話題関係」の枠組みを、さらに、話し言葉の研究の視点からは、山根(2002)に代表される「フィラー」の概念を、最後に、日本語と中国語の対照研究の視点から木村・森山(1997)の「聞き手情報配慮」の概念を詳述する。これらが本研究の分析に不可欠な分析視点であることを論じた上で、個別の分析視点からは明らかにすることができない談話レベルの機能を、これら４つの視点を統合した複合的な分析方法で明らかにすることの可能性を論じ、以下の章でそれを検証した。

第４章と５章では、第３章の複合的視点の分析枠組みに則り、それぞれ、日本語の談話資料（雑談資料と面談資料）に現われた接続詞「(それ)で」「だから」「じゃ」「でも」と、台湾華語の談話資料（雑談資料と面談資料）に現われたもので、日本語の接続表現に対応するとされる、“然後”“所以”“那(麼)”“可是”をとりあげ、それらの談話レベルでの機能を、整合性関係、話題関係、フィラーの機能、および「聞き手情報配慮」の視点から分析する。

第６章では、４章と５章の結果を対照させ、日本語と台湾華語の談話標識としての接続詞の共通性と個別性が議論される。まず、整合性関係からは、日本語も台湾華語もともに、書き言葉に見られた命題間の緊密な論理関係を示す用法から、話し言葉にしか観察されない語用論的な用法まであることが明らかになり、いずれも、論理レベルでの働きに大きな相違はなく、それぞれの表現が表す整合関係によって、聞き手に話の流れを予測させる機能を有するとする。

話題関係では、日華に違いが見られる。既出の話題に再度言及したり、新しい話題を導入したりする談話の方向制御に際しては、日本語は、メタ的言語との共起が義務付けられているが、台湾華語の接続詞は、遠く離れている先述の話題を取り戻す際や新しい話題を導入する際にメタ的言語と共起することは義務的ではない点で、木村・森山(1997)の「聞き手情報配慮」の条件が日本語と台湾華語を大きく分かつものであることが認められたとする。

最後に、フィラーの観点からは、日本語と台湾華語の接続詞がフィラーとして使用されうるかどうかは聞き手に課す推論の量の多寡（本論文での表現は「聞き手に計算を強いるかどうか」）と関連しているという結論を導くに至った。

第７章では、本研究は、談話標識を複合的な視点から分析することによって、体系論的に異なる日本語と台湾華語の談話レベルの共通性と個別性を明らかにすることを可能にしたと結論する。

以上が本論文の概要である。本論文は、話しことばにおける接続詞の現われを談話標識という観点から捉えなおし、日本語と台湾華語の談話標識の談話機能の対照研究を試み、日華両言語の談話構造そのものへの洞察を深めることを可能にした点、また、いくつかの理論的枠組みを組み合わせた複合的な視点からの分析方法を適用することで、単一の枠組みでは明らかにすることができなかった両言語の談話レベルの異同を捉えることを可能にした点が評価できる。また、接続詞の機能の多様性を実際の話しことばのデータを基に帰納的かつ質的に議論したこと、および、言語教育への応用の可能性を示唆したことも評価に値する。このような点から、本研究の当該研究領域への貢献と学問的意義は大きい。

とはいえ改善の余地がないわけではない。審査では，いくつか指摘がなされた。まず、談話標識の多機能性の分析にあたり、本論文が援用した３つの理論枠組みを統合するような分析モデルの構想には至っていない点が複数の審査委員から指摘された。また、聞き手の推論の負荷という意味で用いられている「計算」あるいは「計算の量」といった概念について、本論文にあるものより厳密な定義が必要であろうという指摘があった。さらに、本論文は日本語と台湾華語について話しことばのデータから帰納的に論じる方法を採用したが、接続詞の多機能のどれを分析するかという選択の妥当性、またこのような分析結果に基づく一般化がどこまで可能であるかという質疑もなされた。

しかし，これらの指摘は，本研究の根幹を左右するようなものではなく，また多くは著者の将来の研鑽に期すべきことがらであり，本論文の大きな学術的貢献をいささかも損なうものではない。

以上の諸点に鑑み，本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。